



少
し
も
た
ら
な
い
花
ぞ
も
れ
也
祇

雲と志はるの男のまげさ
也

さ
ら
り
帰
も
え
う
れ
の
友
や
旅
の
花
柏

思ひも別れぬ野道のゆま
祇

露も心へ風も光やかきこへん
長

小舟のふりまう神の秋風
柏

和風心はほれ神一宿出さ
宗祇

山石たすくた冬や照るん
宗長

清心堂にゆ茶色濃
山洛哉
月柏

何人

延徳三年十月廿日

伊地知氏書冊



身をなごさるやの鈴舌の去
柏

古里に残した清き雪をりて
長

世に古き道をあはれ引れ
祇

何をこもみぢきよとく恨や
柏

身老は山嶺人かあぢ
長

石もたぬ草も枯れに花
祇

静れを月にけり添り
松

秋の萩も寝ぬ枕に明や
長

思ひのあはれをこも
祇

をきかぬわが粒を合ふ
柏

さよふはなれは人か
長

住みぬれはこゝろを
祇

二
今もこゝろにあり
松

わきこゝろをわたりぬ
長

いづれとせむと只秋の
祇

まなこはわが心を命ふそ
さよふはつて人らさ
住みぬれ今も
祇 長 柏

二
今も心はつて
祇 長 柏

わきまはつて
祇 長 柏

心はつて
祇 長 柏

堂に
祇 長 柏

この心はつて
祇 長 柏

持て
祇 長 柏

涙
祇 長 柏

後
祇 長 柏

心
祇 長 柏

麻の音
祇 長 柏

野
祇 長 柏

閑
祇 長 柏

けしきとていふは

松

我々の心は

松

古の道

松

花の

松

梅の

松

竹の

松

草の

松

木の

松

石の

松

水の

松

土の

松

空の

松

人の

松

山

松

川

松

海

松

はなもたふかきしははな
夕ふはにありしゆめはな
寸ふ若きもぬもたはちむ
紙 長 木

ゆらしし縁を人よき^志し
松

かめかきしははなはな
長

ふしははなははなははな
紙

ははなははなははなははな
松

ふはははははははははは
長

ははははははははははは
紙

ははははははははははは
松

ははははははははははは
長

ははははははははははは
紙

ははははははははははは
松

ははははははははははは
長

ははははははははははは
紙

あやぶくならぬ思ひ絶えや 拍

杉山古くも長し松夏無の汗 長

老をや人も身をまへん 祇

古き一法も昔も道はく 松

雪ふ山駒のまじり 志山 長

神さへくぬを付司の能く 祇

うき世にわさや 松風のま 松

花をばし思ひ絶え月の人 長

あはれみのま 松 祇

まをうけらむとせむに 松 長

海山の古き松の音 長

うちわきよぬれぬと 松 祇

今朝や身に入ふ天の川風 松

衣はすも宿をわすれ 長

うきは海にま 野道のま 祇

影まをうけぬと 松のま 拍

深きうの古き響きの声 長

うちねむるおぼろの音に 池

今初や身に入ふ天の川風 松

夜もすし初を覚む外起ふれ 長

芳は海を渡る野鳥のさかると 池

新き雪の足音のしる音 拍

心ゆくもはなれぬものぞん 長

きりぎりすの浅き夕烟 池

よゆらけしとそれとをわ 松

はうらや西の心れ葉の音 長

身もぬるものゝ思ひきん 池

^名 入る眼も車もよむと道が 柏

冬のはらけに氷のうら 七

夕霧のしらけの音に 池

ふゆづのどの月めらひま
拍

きねなく清めきり
拍

右人りまてすをこまめく
拍

きねや回を便しおははし
拍

けは志まを増はさしき
長

暑かき氣を秋の秋め
拍

衣まにへ 朝の戸
拍

毛かあは山のき雲お鹿き
長

尾とぬまもい見んを毛
祇

平のちねらまふし人の中
拍

珠まにへりしりぬま
長

名ウ
わにちや名おの園の
祇

鈴のまきたまにこまめ
拍

思ひくらまらぬまにまはし
長

はらまの花を跡の山山
祇

疎さハ何れゆじりゆわたり

長

名ウ

わにちや若狭の國の森

祇

鈴好まきなまきくもく

柏

思ひくらすもははははははは

長

あはる花を舞の山山

祇

んとも深山の母捨人

柏

いんはるるるるるるる

長

手後おらとくま古里と

昭多し

祇

一村西月と空と

柏

宵拍之四

宗長之三

宗祇之三

今ハ有馬三郎ト云々
之人ハ以テ中ノ留ト云
ミテミテ有馬ト云々
ハ懐柔ハ宗祇ト云々
ハ然レドモ一ト云々

三三
三三

石岳寺

玉案

庫20
28